

カザフスタン共和国におけるオーラルマンズの状態

庄司ゆり子（国連FAOローマ本部技術協力プログラム支援室）



copyright Chris Herwig

中央アジアに位置するカザフスタン共和国は世界で9番目に広大な土地面積を有し北はシベリアから、中央アジアのステップ、南はシルクロードの拠点と国境を接している旧ソビエト連邦から1991年12月に独立した若い共和国である。カザフスタンは多民族国家として謳われ、知られているだけで100以上の民族が共生している。この地域はソ連時代、ソ連崩壊後を通じ近年に渡って激動の中で激しい人民移動を繰り返してきたが、その“負の遺産”を自ら体現している人達に、オーラルマンと呼ばれるグループがある。

カザフスタンはもともと帝政ロシアが勢力を伸ばしつつあった歴史の流れの中で南のシルクロード・砂漠地帯の騎馬民族・遊牧民族の征服・統合を続けた結果併合されたアジア系藩国

に属し、近隣のキリギス・ウズベク共和国とともに帝政ロシアの時代から罪人・政治犯・不穏分子などの流刑の地の役割をも果たし、文豪ドストエフスキーなども数年を東北部セミパラチンスク市で過ごしている。ソビエト時代、特にスターリン下の恐慌政治、粛正の間、反対派の各印を押された者、インテリ、芸術家、事業家、少数民族、外国人などが身分上の様々な理由で生活の拠点を追われ、強制労働収容所やステップでの集団農耕に携わる事を余儀なくされた。一見スラブ系、ロシア系と見られる現在のカザフスタン人達の中でも、ウクライナ人やヴォルガドイツ系などのサブグループやマイノリティーに属し、また工場や事業を摂取された実業家などルーツが驚くほど複雑な人たちが多い。第2次大戦前後に日本人と密通していると疑われて強制移住を命じられた朝鮮民族は大きなコミ

ユニティーを形成し、現地のバザールでも朝鮮系のバブシカ【おばあさん】たちがカラフルなキムチや豆腐などを売っている姿が日常的である。1937年以降ドイツ軍への協力の嫌疑の元強制移住を強いられたチェチェン人など、¹一部には少数民族の勢力が集中するのを防ぐためソ連時代に故意に分散された民族が現在のお国許ロシアでの部族闘争と係りを持ちかねない火種も抱えている。

その中に、オーラルマンズと呼ばれる人達はいらる。彼らは一体誰で、何処から来たのだろうか？カザフスタン政府のホームページ（electronic Government of the Republic of Kazakhstan copyright 2006-2009）によると、1991年カザフスタン共和国独立の時点に何らかの事情で国外に在住していたカザフ系民族の人間で、1991年の共和国の人口移民条例により希望してカザフスタンに帰国、国籍取得を申し出ている者を総称で示しているようである。

私は、2005年から2007年の間、在カザフスタン共和国の国連開発計画（UNDP）に勤務していたが、その在任期間中、オーラルマンの社会復帰に関して国際移住機関（IOM）と繰り返し協議を行い、共同でディスカッションペーパーを発行した。²2005年の調査によるとそれまでに約46万人がこのようにしてオーラルマンの認定を得、特例により帰国・帰化を許可されたと言う。

ここで、カザフスタン共和国に於ける国籍と民族の違いに触れないといけない。国籍・英語で言うcitizenship（市民権）保有者は、共和国としてのカザフスタン人となり、必ずKazakhstaniと言う長い名称を使用する。それと別にnationalityと称した場合、ロシア人、カ

ザフ人、タタール人などの「民族」を示し、この区別もパスポートと呼ばれる国内でも使用するIDカードにも示される。民族の呼称に関し、社会的にタブーとなっている国も多いようだが、カザフスタンに於いては公である。但し、ソ連崩壊、中央アジア5カ国の独立時の混乱の際に間違っで登録され、そのままの例も多いようである。オーラルマンに関し、「カザフ系」が条件になっており、カザフスタン共和国での一種のaffirmative action,（人種政策）を表しているようである。

このような人種政策は「過去に執行された不公正な政策を是正させる為」また「健全な国家形成と国内の安全保障のための政策」として位置付けられている。

オーラルマンと呼ばれる人達のカザフスタンに戻る以前の居住地はウズベキスタン、モンゴル、キリギスタン、ロシア、トルクメニスタン、イラン、アフガニスタン、トルコ、中国などで、70年近く遠い故郷の言語・文化・伝統を守りながら、帰化の際には各地の新しい文化・習慣を持ち帰りそのサブカルチャーとの折り合いが故国での適応に微妙に影響を与えているようである。中には際適応しきれずに再度国外に移民していく人達もいたようだ。

カザフスタン共和国独立時に国外に居住していたカザフ人の大多数が1920-30年代にソ連の一部であったカザフスタンでは遊牧民の強制的な定住化と集団化が行われその過程で飢餓や混乱のため145万人から175万人の人口が失われたが、その際国外脱出した人達、また1950年代のフルシチェフ時代にカザフスタン北部で穀物生産の処女地開拓が実験的に行われた強制的なステップ開墾や集団労働を逃れ故郷を離れた人々

の子孫である。その意味で自らの意思でなく、やむなく国を捨てた人々と理解されている。当時約20万人がトルコ・中国などソ連以外へのがれ、カザフ以外の中央アジアのソ連内共和国でのカザフ系の人口は75万人に達したと言う。同時に役人・軍人・熟練労働者などの登用でカザフスタン内のロシア系住民の人口が増え、一時カザフ系を上回る時期も経て独立を迎えた。

オーラルマンに関しては、毎年大統領自らの指導により特別の移民枠が設けられ、福祉・厚生の対象になっているが、年々この枠にもれた人々の福祉の問題が浮上し、また農村地帯などで貧困層の現地の住民からの嫉妬・羨望の対象にもなっている。この特別枠により移民先なども特定されるがオーラルマンの帰化の際の不適應の理由に言語的な問題、生活習慣の問題などが挙げられる。これはスラブ系人口の多い北部において顕著であり、逆にカザフ系の文化が保持されている南部では比較的適應が容易であるようだ。言語に関しては、現在のカザフスタン共和国でソ連崩壊後もロシア語が公用語としてカザフ語と並んで使用されているため、就学や就職にロシア語の知識が要求される。書き言葉に関しては、カザフスタン共和国を初め中央アジアの数国やロシアでキリル文字が使用されているのに対してトルクメニスタン、トルコなどではローマ字が使用され、イランやアフガニスタンなどではアラブ文字に似た古代カザフ文字が使用されていると言う。

オーラルマンの移住元に関してはウズベキスタンが一位で、次にモンゴルからの帰還者が多いのが実態であるが、独立時に同じソ連の共和国としての歴史を共用してきたウズベキスタンからの帰還者については、余り話題に登らない。一般には、オーラルマンと言えばモンゴルから

の帰還者としての印象を持たれる事が多いようである。カザフスタンとモンゴルはお互いにジンギスカン、チムールやアブライハーンの輝かしい歴史を持ち、騎馬民族としての誇りを持っていた国家だがソ連時代の役割や生活習慣など微妙な差異があり、お互いにライバル意識を持っていると言われている。

カザフスタンはソ連時代からソビエト連邦内“カザフスタン及び中央アジア”の名称が示すように他の4カ国とは別核の扱いでソビエトの政治機構の中で経済・工業発展の要所と見なされ最もモスクワに緊密だった衛星国であり、そのプライドが今でも国民性のなかに継承されているようである。特に旧ソ連諸国以外からの移住者は“非文明的な田舎者”と映るようである。³また、ロシア化、都市化が進行したカザフスタンの住民に対比してモンゴルなどで遊牧生活、テント生活を続けてきたカザフ系のオーラルマン達は衣服・家財道具・生活習慣など細かい部分での差異が大きいようである。

自然資源にめぐまれ、独立後も急速な経済成長の波に乗るカザフスタンは雑多な民族が協調して共存できる寛容性を持つと言われるが、同時に現在の社会では昇進・出世の機会や登竜門となる国家留学生などには明らかにカザフ系住民が優遇され未来のエリートとして養成されている。その為特にスラブ系の住民で雇用や好待遇を求めてロシアや外国に移民を希望する者も多い。オーラルマンの中にはカザフ系人口保持の政策として一見優遇措置を享受するかに見えながら、ソ連時代の強制移民の先でも、望んで戻ってきた帰還先でも社会の底辺で過ごす結果になる人達も多いとも言われている。現在のオーラルマンのカザフスタン社会への編入、適應を困難にしているのは、文化、生活習慣の差異

よりも、福祉厚生枠の適用など、経済的な機会、就学や雇用機会を巡っての、現地の住民との競争によるものが多い。文化的な差異もあるものの、広大な国土に比較的少ない人口分布のカザフスタン共和国は帰化受け入れには好条件を持ち合わせている。今後の国家としての発展を見据える中での課題の一つと考えられている。

注 _____

- 1 池田徹朗、“ソ連時代の共和国政治” 日本評論社刊、2004年“現代中央アジア論”
- 2 “Status of Oralmans in Kazakhstan — Overview” United Nations Development Programme, Almaty, 2006
- 3 岡奈津子“民族と政治” 現代中央アジア論より